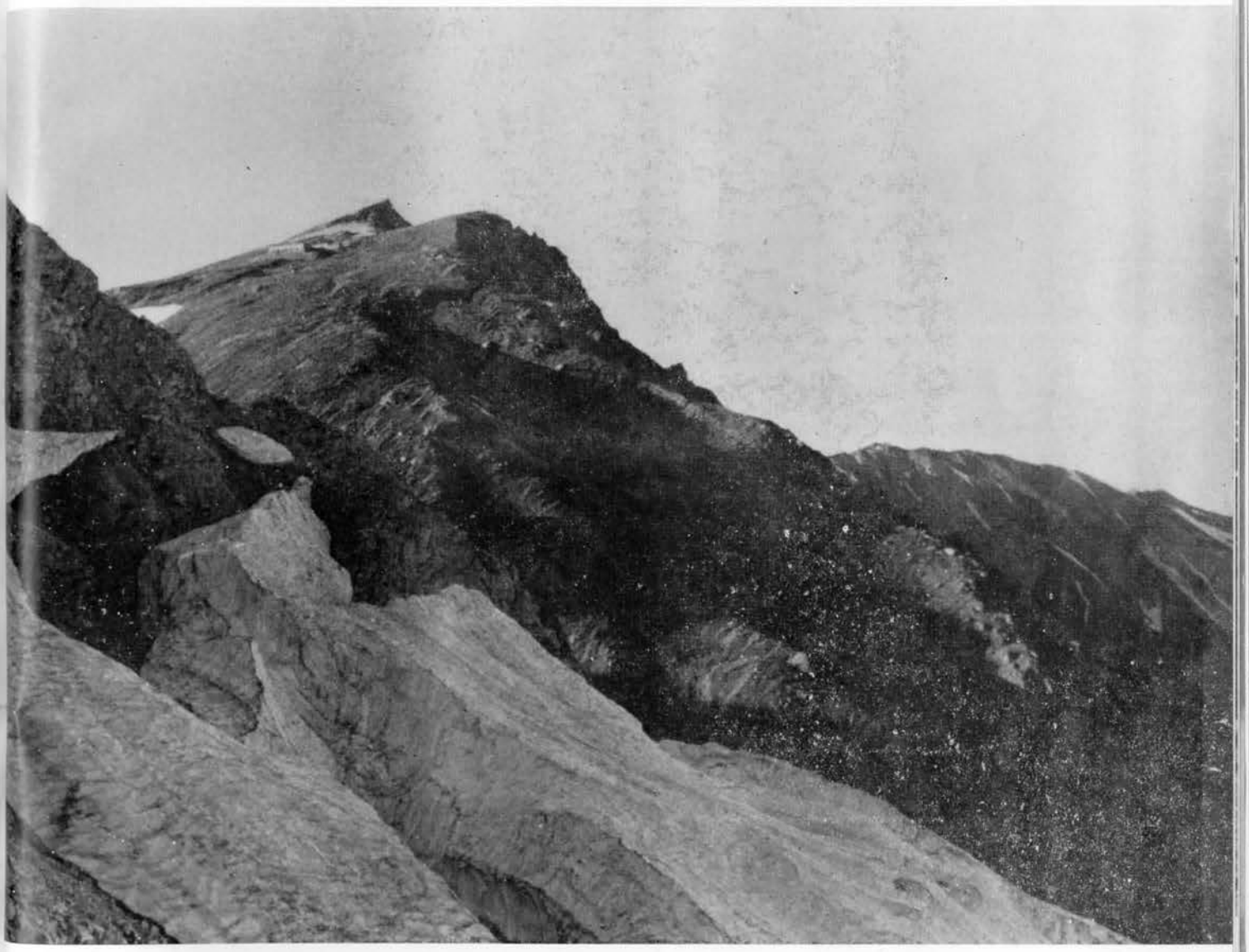
毎月1回20日発行　　（昭和31年3月28日第三種郵便物認可）

山と博物館

編　集　大町山岳博物館



白　馬　岳

Mt. Shirouma

久しい地球の歴史のなかで、常に新らしくつくりかえられていく白馬岳の峰々。これに比べると人間の歴史と命は短い。しかし、その命に白馬岳が認識されて「山があるから登るのだ」という近代アルピニズムの今日に至るまで、白馬岳と人との交渉は時代とともに変っている。開拓者たちが疲れを休めた岩はあの山頂か……彼らの旅情を慰めた花はこのコマクサか……。

NO. 19　　1957年7月20日　　大町山岳博物館 発行

大正初期の登山風俗、ももしき、はらかけ、すっぽわらじ、はっぴ、こうかけ（底の厚いたび）、ござ、はばき等を使用した。

白馬（しろうま）岳100年

福岡孝行

1924年のエヴェレスト遠征は悲劇的な幕をとじた。頂上を真近かに第二の段を登ってゆく二つの黒点、マロリーとアーヴィンの姿は深い霧に包まれたまま再び現れなかった。二人が頂上に立ったか否かは永久の謎として登山家の胸に生きているこのマロリーが生前「どうして山に登るのか」ときかれたとき「あるからですよ」と短く答えた。しかし、このことばは短いうちに近代アルピニズムを特徴づけている。

山に生活の糧を求めたり、戦いのために登る場合その登山行為は「目的のための手段」となっている。そしてこれは近代登山とはいえない。山があるから、好きだから登る、つまり、登山のための登山、これが近代登山である。

わが国の山はかゝる近代登山の興る前に殆んどその頂上を極められている。山には必ずといってよい程に神々がまつられ、富士も立山も古くから歌にもよまれている。

←明治末頃の白馬尻の小屋（千山万岳より）

白馬はしかしながらこの点で他と趣を異にしている。なる程信濃の国は大国主命の国土経営と建御名方命の国譲りのいきさつのことで古事記にも記されている（当時は科野と書かれた）。したがって糸魚川から信濃への通路として姫川谷を通った人の目にもふれたと考えられるがそれらの人々には西の天空にそびえるけわしい峯々としかうつらなかったであろう。富士や立山などには近代登山の前に既に宗教的登山、登拝があった。だが、白馬にはそれがない。これは白馬の一つの特色である。おそらく白馬は藩政時代にいたるまで殆んど注意を引くことのない山であったろう。

明治になって一度に近代国家の体制整備に突進した時、地理地質の調査のために登られたのが、この山の近代的脚光を浴びた最初といえよう。それは明治も22年のことである。

近代アルピニズムは明治の後半に日本人のしらない間に入って来た。ヨーロッパのアルプスと同じようにそれはやはりイギリス人によってである。マアシャルや、はじめて「ジャパニーズ・アルプス」という言葉を使ったガウランドなど一連の英人のエクスペディションないしはエクスプローレィション（原意は探りを入れる）であった彼らの登山も氷河の探求という学術的な目的の「ため」のものである。世界に「日本アルプス」を広く紹介し、また日本山岳会の設立（1905年 明治38年）の促進者の役割をしたウエストン牧師は、白馬についても開拓者といえる。

白馬が近代登山の対象となったことを端的に示すのはウエストンの登山である。

明治27年、彼は「中央日本アルプスへ第四回目の、最後の夏の登山を企て、全山系を北から南へ横断」してこの山系全体をはっきり頭に入れようとして、英人ハミルトンと浦口氏と一行三名で東京を発ち、本州を横切って直江津に、ノミに悩された一夜を過して、舟で糸魚川にわたり、海水浴をして焼けつくような暑さをしのいで、涼しい谷間へ急いだ。姫川谷を大所川との合流点まで歩いて八町坂を経て、蓮華温泉に着いた。一晩中さわぎ続ける赤銅色をした湯治客の一行になやまされ続けたあくる日蓮華銀山を見てから、雪渓をのぼり這松や石楠花の生えたところを通って雪倉と大蓮華との山稜に出て午前10時に最高点に立った。南に甲州山脈の彼方百哩に富士の山頂をのぞみ、また近くには立山や主山系の雪の縞をつけた巨峯

大正九年　田中阿歌麿氏が湖沼学の研究に登山、白馬大池にゾック製のボートが荷上げされた。

をながめ、北西には黒部の急流が日本海にひらめき流れ富山湾の向うに能登半島をのぞみ見たりして頂上のひとときを味った。帰路は下り瀬に出て姫川谷の山峡を抜けて森（現在の森上）で四ケ庄平（四ツ谷盆地）から大蓮華を仰ぎみながら大町へ抜けている。

大蓮華というのは白馬の越後側の呼び名である。白馬はハクバではなく、シロウマで、田植の苗代をカク（作る）頃に雪の消えるとともに現われる黒々とした馬の形をした岩で、この黒い馬が出ると山麓の農家は苗シロの仕事に取りかゝらなければならない（ただし農業技術の進歩した今日では四月のうちに代かきをする）大町の種まき爺さ（爺ケ岳）や農鳥岳と同じように農業暦から来た名前であるから、ハクバ——白馬と呼ぶと、かけ出しの馬脚を現すことになる。

明治44年山木屋（今の白馬館）の松沢貞逸氏が北安曇郡に初めて自動車を移入、登山者に便を与えた。写真下は朝香宮泰彦王殿下の登山の際山木屋の前で。

白馬岳山頂のスケツチ（千山万岳より）

明治三十年代に入ると河野齢蔵、矢沢米三郎、武田久吉等の植物学研究者で登山のとりこになった大先輩が盛んに登山し、高山植物に「シロウマ」の字をつけた数多くの新種を発見した。白馬の開拓時代である。

大正二年に同じく植物学者の志村鳥嶺氏の出版された「千山萬岳」にはウエストン師が序文を寄せている。信州方面の登路として同書には、「北城村大字四ツ谷区より登攀すべし」という書き出しで四ッ谷は糸魚川街道に沿う部落なり、中央線明科駅より大町を経て十二里馬車人車の便あり、また、長野市より鬼無里村を経て十一里途中柳沢峠あり人車を通ぜず、四ツ谷には旅舎山木屋あるのみ、僻陬不便多けれども、白馬登山者は皆ここに宿するを常とする。などの文字がある。「朝日に映じては残雪白駒の蒼穹を奔騰するが如し故に信州民呼んで白馬と言い、夕陽を受けては紅蓮の空際に開けるに似たり、されば越人名付けて大蓮華と称す」ともあるように白馬の稜線は大日岳から北にかけての山容は白い馬の背のようでもある

白馬頂上の最初の小屋はさきの河野、矢沢両氏が当時一旅人宿にすぎなかった白馬館にすゝめて建てさせたといわれる。小屋といっても九尺二間の、まわりに石を積んで、屋根をのせた名ばかりのもので立ち上ると頭がつかえる。ただ寝るだけのものに過ぎず、飯炊きその他一切は全部外でしなければならなかった。

当時のガイド——人夫は必ず細野の人達だった。しかし、当の細野では山に登ると天候が狂うと反対する者も多く、人夫に出る者も気狂い扱いはされないまでも、変り者とされた。

大正の最初の十年間に急ピッチで近代登山が盛んになり、スキー界の先達笹川速雄氏の一行は越中側から積雪期のスキー登山に成功し、大雪渓を降り、慶応や学習院のパーティーも同じく積雪期に登頂を試みている。やがて各学校の集団登山も行われるようになった。

白馬は山麓に人里があり——農耕地帯——二股からは落葉濶葉樹林がはじまり、白馬尻附近は灌木や草地が目立ち、大雪渓を終ると葱平（ネブカッピラ）の斜面、更に小雪渓をわたって一登りすると美しいお花畠といった工合に「山」の一つの理念を示すように、移り変りを味って頂上に立てるところに大衆性の要素を備えている。殊にそのお花畠は美しい。越後や越中側からの登路より大雪渓経由の四ツ谷口が多くえらばれるのは交通の便もさることながら、こうした理由によるのであろう。大町観光案内所の調査によると昭和31年には約4万の登山客が白馬に入っている。ウエストン師がその頂上に上ってから二世代約60年の移り変りがこの山の俗悪化のならないことを心からねがうものである。←写真は白馬山頂石室の落成記念（現在の村営の小屋）当時「雛山の小屋」と呼ぶ

成功だった山の自然科学教室

木崎湖夏季大学で標本を整理する生徒たち

本館で博物館学の実習

わが国の博物館運動はようやく緒についたにすぎない。そして、地方文化の興隆をめざす地方博物館は経済問題と社会的認識の低さに常に悩まされている。東京教育大学では教育学部博物館学受講生30名を対象に7月22日から28日の7日間、この問題の追究とともに地方博物館のあり方についての実際的な研究および学芸員に必要な教育活動の実習を本館において実施した。最初の試みで成果がきづかわれたが受講生は北アの麓のもとで地方博物館の窮状を身近に体験して意義ある一週間を過した。

山岳会

大町市役所山岳部

長野県大町市

設立は昭和28年、北アルプス鹿島連峯、烏帽子連峯、槍の一部まで含む広い地域の市、その市役所の中に山岳部が出来て5年、現在部員は28名、毎年の夏の訪れとともに山に魅せられたようにおしかけて来る登山者に先だって静かな渓谷に岩場に若い命を燃やしている。白雪の岳を眺め、紺碧の空にそゝりたつ岩肌を恋し、渓流に憩う、それは山麓の若人のみが浴せられる山の喜びであり、生活の一部でもある。

（博物館だより） 6月9日研究会鹿島方面ワラビ取り　20日～22日鹿島槍岳方面雨量計設置　23日同好会八方山日帰登山　26日黒部上流雨量計設置出動　28日博物館協議会　7月4日居谷里動植物気象調査　7日同好会だより2号　13日新館塗装工事入札　同好会高瀬渓谷不動滝方面ハイキング　15日嘱託員調査員会　20日～21日移転作業　21日～28日東京教育大学博物館学実習　22日同好会山の歌声の会　26日～30日山の自然科学教室開設。

【今月の寄贈】 ニッコウムササビ1体大町市社林保夫　ノリス1体北安美麻村役場吉沢幸基　松本新聞号外西南追討略記1部大町市東町北村登志世　カッコウ1体大町市常盤清水五十川充　龍吐水1台上水内郡信州新町信級長者関口正　ヨタカ1体大町市三日町篷田喜美男　図書滅びゆく野鳥1冊神奈川県藤沢市辻堂福岡孝行　図書信州方言風物誌大町南高校福沢武一　（敬称略）

お願い　本紙の購読御希望の方は　1年分購読料170円（郵送料共）を現金書留または郵便為替、郵便切手で御送り下さい。　大町山岳博物館

第一回「山の自然科学教室」が7月26日から5日間、木崎湖夏季大学及び北アルプス八方尾根で開催された。これは本紙16号でお知らせしたように都会の中学生を対象に夏休みを利用して、特色ある大自然に親しみながら、自然科学の勉強をしようと計画されたもので、都内代々木中学、御園中学、足立七中、第二大島中、月島三中、鈴ケ森中など六校から 160名の参加者があった。指導は植物の印東弘玄（東京教育大教授）、動物の鶴田總一郎（国立自然教育園次長）羽田健三（信大教育学部講師）、地質の田中邦雄（信大教育学部助教授）の諸先生が当ったほか、東京教育大学野外研究同好会の学生山岳博物館の調査員、学芸員も指導、引率に当った。初日からあいにくの雨で予定を変更し、高瀬渓谷、葛温泉方面に昆虫、植物採集にでかけた。第2日目は植物について印東先生の講義があり、午後は木崎湖周辺を採集に歩いた。

29日は梅雨が明け、久しぶりに好天にめぐまれ、八方山登山を行った。天候の変化が激しいため行動には万全を期し、雨上りで道が悪く滑る中を、各班毎に登山、その日は黒菱小屋に宿泊、八方の岩石湿地の動・植物の観察を主体に指導を受けた。又夜はキャンプファイヤーを囲んで楽しいひと時を過した。翌30日午後下山、全日程を終了した。この間不運にも悪天候続きで予定の行動ができなかったのは残念だったが、自然にめぐまれぬ都会の生徒には雄大な自然の美に接したことと採集した自然物とが何よりのみやげであった。

博物館のマーク決まる

かねて依頼中であった大町山岳博物館のマークが決まりました。図案は応用美術社、鈴木貞三氏でOMACHI ALPINE MUSEUM（大町山岳博物館）の頭文字O、A、Mを図案化したものでOは広く目を開くという意味に、A・Mは山岳を表わしています。館旗、バッチ等に使用されますが、今後みなさんのマークとして可愛がって下さい。

郷土の民芸品　オオハクチョウ

大町市の名物、駅前の大白鳥がみやげ品として作られている。この大白鳥は、昭和24年1月仁科三湖に飛来した中の一羽で、地方文化の開花のために突如として訪れた女神であり、文化郷のシンボルになってくれた。その後、8年間依然健在で猛暑の中を涼しげに泳いでいる姿は、地元の人々を始め遠来のアルピニスト達の旅情をなぐさめている。

編集後記　▲暑中御伺い申上げます。種々の館務が重なり大変発行がおくれてしまった。博物館もようやく新装なった東山台上に移転した。8月10日開館、15日には大糸線全通記念山岳展が開催される。▲朝夕の涼風が頬をなで、眼前に展開する市街地、アルプス連山、緑に囲まれた尨大な建物、苑地の芝に寝そべって見る澄んだ空、変化に富んだ雲の動き。▲めぐまれた環境は訪れる人々にきっと満足を与えるであろうと館員一同整備に展示に日夜徹している。

山と博物館　No.19　1957.7.20発行
発行所　大町山岳博物館
長野県大町市神楽町電話211番
印刷所　信州印刷株式会社